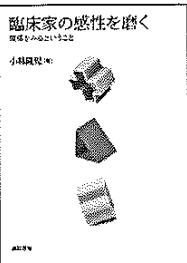


いわゆる学術書で、これほど心搖さぶられ、胸が熱くなることはなかつた。

精神科医である著者が、そもそも心とは何か、心の治療とは何かを自らの臨床実践から語る。そして、心の治療に欠かせないものが人ととの関係を見る、心の動きを感じ取る感性であるとする。その感性を磨くにはどうしたら良いのだろうか。大学教員でもある著者が、まさに心を感じ取ることを生業とする対人援助職をめざす大学生、大学院生に対する、感性を磨く教育実践を詳らかに表す。

学生たちは少人数のグループで乳幼児期の親子の関わりを録画した映像を観る。映像に登場する親子は、自閉症スペクトラムをはじめ、何らかの関係の難しさを抱えている。親子の心の動きを捉え、自由に感想を出し合い、議論していく。痛みや苦みを伴う。しんどさがある。ある学生は他の学生からどう思われる



誠信書房
A5判
本体 2,500 円

臨床家の感性を磨く —関係をみるとこと

小林 隆児

〔著〕

るかに気をとられ、意見が定まらない。ある学生はことさらに専門的な知識を用いて心の動きを捉えようとする。ある学生は子どもの姿に自分を重ね、激しく動搖し、何も言えなくなる。他人事ではない。誰しも身に覚えがあると思う。心の動きを感じ取ることが決してたやすくないことではないことに気づかされる。

その難しさに向き合う、それぞれの姿もまた描かれる。学生たちは親子についての議論を通して、自らに湧き起こるさまざまな思いを必死に感じ取り、表現しようともがく。自らの育ちや生き様に目を向けざるを得なくなる。これまでやり過ごしてきたさまざまな思いにさらされ、その思いを、自らの親子関係を見つめ、語り、難しさの向こう側に辿りついでいく。痛みや苦みを伴う。しんどさが伝わってくる。その姿はとても率直かつ

誠実であり、己の身を、心を重ねて読まざるを得ない。

改めて考えさせられる。私たちが相手の気持ちを感じ取ることができるのはなぜだろうか。あるいは、感じ取っていると思えることができてるのはなぜだろうか。本書には具体的な感性を磨く術が示されているわけではない。著者の手によって現される、臨床家を目指す者たちの、感じ取ることをめぐつてもがき、葛藤する姿に触れ、どんな思いを抱くか。読者である、私たち自身の感性が問われているのだと思う。

最後にもうひとつだけ。感性を磨くことはしんどさを伴うことである。けれども、そのことによつて心は自由に、関わりはより豊かになつていく。本書は、あらゆる人々にも向けてそう語りかけていくと思う。